



『三田文学』
1910年5月(創刊)号(右)と
1935年5月号



読書の秋

三田からはじまる文学

文芸雑誌『三田文学』のことを、どのくらい知っていますか？ 名前は知っているけれど……と言う塾生も多いのではないだろうか。『三田文学』は、もちろん義塾にゆかりの深い文芸雑誌だが、作品の執筆者は塾員、だけではない。明治から現在に至るまで、多彩な文学者が、素晴らしい作品を寄せている。近年では三田文学新人賞を設置して、新人発掘にも力を入れている。三田から広がってきた文学の歴史を紐解いてみよう。

初代編集長は永井荷風
その推薦人は森鷗外

『三田文学』の創刊は1910年。当時の義塾は文学科・理財科・法律科からなる大学部が設置されて20年を経っていた。しかし、文学科は学生数が少なく、廃止の危機にさらされていた。そこで改革のため08年に義塾幹事(今の評議員)の石田新太郎を中心に文学科教員によって、三田文学会が設立された。石田は、三田文学会を発行母体に文芸雑誌を創刊し、名のある文士を教員に迎えたいと、文学科顧問であった講師として「審美学」を教えていた森鷗外に相談し、鷗外の推薦で『あめりか物語』『ふらんす物語』で注目を浴びていた31歳の永井荷風(壮吉)が、

文学科教員および『三田文学』編集主幹として義塾に赴任した。

創刊号が世に出たのは5月、藤島武二による表紙は、センスの良さと美しさで注目された。創刊2年目には文学科の学生だった久保田万太郎、理財科の水上瀧太郎の作品が掲載された。また荷風を慕って佐藤春夫、堀口大學らが義塾に入学し、学生時代に詩を発表している。当時は、先行する『早稲田文学』が自然主義の牙城、『帝国文学』が論文主体だったのに対し、『三田文学』は耽美的な作品が充実した雑誌として重きをなしていた。

しかし、1911年6月号の発禁に続き、10月号も谷崎潤一郎の『鷹風』により発禁となり、学内で問題になって「印刷前に原稿を塾監局に見せるこ

『三田文学』年表

明治		大正
1897年頃	三田文学会発足。当初は文学科の学生らによって結成された(1908年には教職員中心の組織として新たに設立)	
1910年5月	『三田文学』創刊。編集主幹は永井荷風。	
1911年	久保田万太郎が『朝顔』、佐藤春夫が『憤』、阿部章蔵(のちの水上瀧太郎)が『山の手の子』で学生作家として登場。	
		1913年1月 堀口大學が『写生』で登場。
		2月 販売部数が5000部に。
		9月 荷風の連載『大淫日記』開始。
		1916年2月 荷風が三田文学主幹・教職を退く。主幹は澤木梢(四方吉)に。

と」と申し渡された。荷風はその後も編集を続けたが、16年2月に『三田文学』主幹を退き、義塾からも去ることになる。

休刊を繰り返しながら 若手作家を育てる

1916年には、留学帰りの美術史教授、澤木四方吉（梢）が編集主幹となり、三田派と呼ばれる第2次『三田文学』の時代になる。18年9月号には芥川龍之介『奉教人の死』が掲載され、翌19年には創刊10周年を記念して名作選の『三田文選』を刊行した。しかし25年3月号で一時休刊となり、水上瀧太郎らの尽力で1年後の4月号から復活した（第3次）。山本健吉、戸板康二、柴田錬三郎など、在学中の文学者の卵が誌面をにぎわしている。36年、国文

永井荷風（1879～1959）

若くして江戸戯作文学や伝奇小説を読み、文学の素養を磨き、アメリカ、フランスに滞在後に才能を開花させる。森鷗外、上田敏、さらには夏目漱石からも才能を認められていた。義塾を去ったのち日記『断腸亭日乗』を綴りはじめ、『腕くらべ』『つゆのあとさき』『澤東綺譚』などの名作を残した。



三田文学会講演会開催（1910年2月）

科卒の塾員、石坂洋次郎が『若い人』で第1回三田文学賞を受賞し、その後出版されベストセラーになった。水上の死去と太平洋戦争の激化により、44年10・11月合併号で休刊した。

戦後の立ち上がりは早く、1946年1月号を復活号として発行した（戦後第1次）。しかし、翌47年から51年4月まで休刊、復刊を繰り返して、51年5月に復活した。その後も数度の休刊を挟み、発行が続く。塾員では堀田善衛、遠藤周作、安岡章太郎、山川方夫（まきお）などが活躍したほか、松本清張、曾野綾子、谷川俊太郎らも作品を発表している。85年からは月刊から季刊になり、現在に至る。94年に始まった三田文学新人賞は2017年で23回目を迎え、数々の作家を世に輩出している。

平成

- 1976年11月～85年4月 休刊
- 1985年5月 季刊として復刊
- 1991年8月 編集人に坂上弘
- 1994年5月 第1回三田文学新人賞
- 2010年 創刊100年

昭和

- 1920年10月 風俗壊乱のため発禁。
- 1925年4月～26年3月 休刊
- 1926年4月 編集委員に水上瀧太郎、久保田万太郎、西脇順三郎ら就任。
- 1939年 この頃より紙の手に配に苦心。
- 1944年12月～45年12月 休刊以降、たびたび休刊を挟む。
- 1947年12月 遠藤周作が『カトリック作家の問題』で登場。
- 1951年6月 安岡章太郎が『ガラスの靴』で登場。
- 1952年11月～53年2月号 休刊
- 1953年3月 山川方夫が編集協力者として参加。
- 1956年10月 坂上弘らが編集担当に加わる。
- 1962年4月～66年7月 休刊
- 1966年8月 遠藤周作らが編集委員に。遠藤は68年1月より編集長。

編集担当者 による

座談会

編集部で触れる文学の魅力

『三田文学』の編集部は、三田キャンパス西館の3階にある。
「生協の隣、体育会事務室の上」というとわかりやすい。
本や資料がぎっしり詰まったその部屋で、
若い編集部員に文芸誌編集の魅力を語り合ってもらった。

——『三田文学』には、現在10名の編集部員がいる。その中の5名に話を聞いた。卒業後間もない塾員2名と、文学部の塾生が3名。岡さんは、作品が三田文学新人賞で評価されたことが編集部員になるきっかけだそうですね。

岡 私の小説『カラー・オブ・ザ・ワールド』が、2016年の三田文学新人賞で佳作をいただきました。子供の頃から読書好きで、学部2年のときに、当時の若松英輔編集長の「文章と表現」の授業を受けたことで、書くことにも挑戦したくなり、応募しました。そのご縁で卒業後、編集部で働くことになりました。

渡邊 私は自分で書くのは自信がないのですが、編集部員だった研究室の先輩の紹介で来ました。『三田文学』は、三田文学会という会員組織のもとで発行されていて、その会員の懇親会や文

学教室などのイベントには、現役の作家の方も参加します。お会いできるだけで感激なのですが、のちにテレビを見て、こんなにすごい作家だったんだ、と驚くこともよくあります。またそんな方々の原稿をチェックするのも私たちの仕事。時にはこちらが心配になるほど赤字を入れることもあります。『丁寧に見てくれてありがとう』と一筆添えられて戻ってくると、うれしくなります。おこがましいですが、雑誌作りは執筆者と編集者の共同作業なんだなと感じています。

井上 今、文学部国文学専攻の3年です。所属する文学系サークルの先輩に編集部員がいて、私もやってみたくて、ホームページから問い合わせると「一度編集部にいらっしゃい」と返事があります。現在は週2日、5～6時間働いて

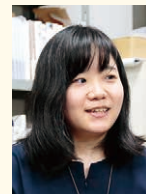
きたいと思っていますので、第一線の作家の方の生原稿を読む機会があったり、たまには姿を拝見したり、貴重な体験をさせてもらっています。

矢部 文学部図書館・情報学専攻の4年です。きっかけは「大銀杏の下で」という学生の投稿コーナーに応募して採用されたこと。編集部におじやまして、編集長や皆さんと文学話で盛り上がり、気づけば編集部員に。皆さんが思っている以上に、『三田文学』は塾生の身近にあります。

山崎 文学部で仏文学を専攻している4年です。僕の場合は、ある授業で教授が「編集部員募集のポスターを見たけれど、誰か興味がないかな」と雑談



文学部国文学専攻3年
いのうえ ゆき
井上 柚季 君



編集部事務担当
わたなべ なほ
渡邊 妙香 君



編集部事務主任
おか えり
岡 英里奈 君



でつぶやいた言葉に、僕の中の何かが直感的に反応して、今ここにいます（笑）。掲載原稿を下読みする機会があるのですが、実に年齢層が広い。高齢の方の文章を読むと、生きてきた時代の違いで、若い自分と精神構造がずいぶん異なることを感じます。実社会で高齢の方と交流する機会が減ったになるので、年齢を重ねた方の感覚を作品で味わうことができるのも醍醐味です。

『三田文学』は身近にある読んで、そして参加して

——編集部員から見た本誌の魅力は。

井上 今は私を含めて、SNSやネットで得た情報を、さも自分の考えのよう思い込んだり、言ったりしがち。しかし、『三田文学』には、検証のもとでも具体的に書かれた記事や、考え抜かれた丁寧な文章の小説が掲載されています。それを読むと、言葉にはそれぞれ質量があるということを身にしみて感じます。

岡 夏季号の特集テーマは「アメリカの光と影」でした。作家や研究者が、真剣に今のアメリカを深くえぐる、重みのある文章を書いてくれました。塾生にもぜひ読んでもらいたい。なお、秋季号ではアジアを特集します。

山崎 トレンドに触れるだけならインターネットが便利。しかし、アメリカをずっと研究してきた専門家の文章は、出来事の後ろにあるものに光を当てて浮かび上がらせます。知識の質が高く、社会の真実を知りたい塾生にはとても役立つと感じます。

井上 みんなに読んでもらうためには、表紙のかつよさも重要。でないと手に取らないし、ましてや買わない（笑）。リニューアル後の『三田文学』は、さりげなくポンと机の上に置くだけで、いい感じです。

岡 塾生には、もっと『三田文学』を知ってほしい。そして読むだけではなく、参加してもらいたい。矢部さんが、投稿がきっかけで編集部員になったと言っていました。みんなも気軽に「大銀杏の下で」にエッセイを寄せてください。投稿作品は必ず私たちが読みます。そして、もう少し頑張れば掲載できるレベルになると判断したものは、例えばここをより詳しく書いてほしい、とか逆にテーマを絞った方がよいなどと、投稿者に具体的にアドバイスをして戻し、書き直しを促します。

矢部 私の場合もそうでした。的確できめ細かなアドバイスをもらって、こんなに丁寧に読んでくれているんだとうれしかったものです。文章を書くことに興味のある人は、ぜひ一度チャレンジしてもらいたいですね。



文学部仏文学専攻4年
やまざきりく
山崎璃久君

文学部図書館・情報学専攻4年
やべえりか
矢部絵莉香君

塾生の投稿に期待しています

『三田文学』編集長

慶應義塾大学名誉教授・前文学部長

関根 謙



い主張を強く打ち出しました。例えば幻想的な作風の泉鏡花に発表の場を提供して、後の大成を後押ししたのも永井編集主幹でした。

義塾創設者の福澤諭吉は、独立自主の理念のもと、封建的な世界を刷新するため、西洋の新しい学問を実学として推し進め、文学をそれらの学問を統括する概念として重視し、一貫して、敬意を払っていました。そして『三田文学』は、その福澤の理念をしつかりと支える役割を担っていたと考えています。

『三田文学』の体制は、誌面の刷新や一時的な休刊などで、戦前は3次、戦後は現在を含めて6次に分類できます。数え方にもよりますが、初代の永井荷風に続いて30名を超える編集者が私の前に名前を連ねています。その中には西脇順三郎、奥野信太郎、石坂洋次郎、遠藤周作、坂上弘、江藤淳など素晴らしい先達が大勢いて、1世紀以上の『三田文学』の伝統をつないできました。この錚々たる歴代編集長に連な

1910年創刊の『三田文学』は今年で107年、日本の文芸誌でこれほど長い歴史を持つものはまれです。わが国の文学界に大きな足跡を残し、これからも新風を吹き込みながら貢献していくことは間違いありません。このような雑誌を慶應義塾が持っていることは、大いに誇りに感じていると思います。

義塾出身の作家たち

文学部はもちろん、他学部出身の作家も数多い。そのなかから、ほんの一部を紹介する。

○現任教員

荻野アンナ

1980年文学部卒業、1982年文学研究科修士課程修了、1989年文学研究科博士課程単位取得退学。文学部教授。1991年『背負い水』で第105回芥川賞受賞、2008年『蟹と彼と私』で第19回伊藤整文学賞を受賞。

○在学中に文学賞を受賞

朝吹真理子

2007年文学部卒業、2011年文学研究科修士課程修了。
文学研究科在学中の2011年に『きこ」とわ』で第144回芥川賞を受賞。デビュー作『流跡』で2010年の第20回ドウマゴ文学賞も受賞している。

金子 薫

2014年文学部卒業、2016年文学研究科修士課程修了。
文学研究科在学中に『アルタッドに捧ぐ』で第51回文藝賞受賞。

○映像化された作品

遠藤周作

1948年文学部卒業。
第2回谷崎潤一郎賞を受賞した『沈黙』。マーティン・スコセッシ監督による『沈黙―サイレンス―』として、2017年1月に公開された。



るのは気恥ずかしい限りであるとともに、身の引き締まる思いです。

言葉が社会と切り結ぶ リニユーアル誌面

戦後の編集者として、惜しまれるのは山川方夫^{まさお}です。曾野綾子、浅利慶太、坂上弘らの才能を見出し、江藤淳を文芸評論家へと導きました。彼自身、小説家として素晴らしい才能を持ちながら、1965年に交通事故で死亡。34歳の若過ぎる死でした。

その後、1976年11月号から休刊していた『三田文学』は85年5月号で

復刊。現在につながる戦後第6次体制

です。この復活は、当時の石川忠雄塾長と理事長に就任した安岡章太郎の熱意の成果であり、復刊にあたり極めて重大な方針が立てられました。それは発行母体である三田文学会を会員組織にし、その会費で発行費用の一部を賄うことです。これにより、独立した組織としての意識が高まり、誌面はより活性化されました。

なお、会員は義塾の出身者、関係者だけでなく『三田文学』の理念に賛同してくださる方なら、どんなでもなれますし、会員の随筆投稿も歓迎です。

また若い書き手の育成に大いに力を入れていたのも『三田文学』の特徴の一つです。義塾出身者に限らず、新人の優れた創作、評論を積極的に掲載していますし、三田文学新人賞は、新人作家の登龍門として高い評価を得ています。また学生の投稿を奨励し、「大銀杏の下で」のコーナーで随筆を掲載しています。さらに夏季号からは20年前の伊井直行編集長時代につくられた「学生創作セレクション」ページを復活させており、学生の創作を積極的に掲載していくと考えています。

現在の編集部は、世界的に評価の高

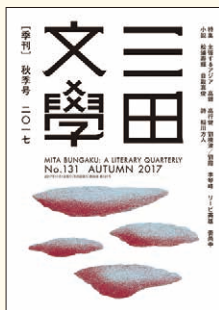
池井戸 潤

1986年文学部、1988年法学部卒業。

「半沢直樹」シリーズ、「下町ロケット」シリーズなど、ドラマ化作品多数。『下町ロケット』は2011年に第145回直木賞を受賞。

い詩人であり、朗読パフォーマンスで知られる吉増剛造三田文学会理事長のもと、義塾教授で編集委員の朝吹亮二、巽孝之、河内恵子、糸川麻里生の4名と体制を組み、さらにホットな文芸誌を目指しています。

今回のリニユーアルでは、社会の現実と言葉はどう挑戦するのかという視点で、特集を組みました。夏季号の特集は「アメリカの光と影」、秋季号は「主張するアジア」です。ぜひ読んでください。そして、創作や編集に興味のある人は、どうぞ気軽に編集部に遊びに来てください。



[最新号]
2017年秋季号 (No.131)
定価980円 (税込)
<http://www.mitabungaku.jp/>